

武蔵野日曜聖書講筵

福音の心臓

――コリント前書第13章1～3節、他――

1986年1月12日

小池辰雄

福音の心臓 三つの焦点 神の愛 贖罪と永遠の生命 聖霊の愛 無即無限無量 もし私に愛がないなら 私にはキリストの愛が来てます 自然霊然が働いていく 神秘的現実 相即一如 放心 新宗教改革

【コリント前13】（私訳）

1たとい私が人間や天使の異言を語っても、もし私に愛がないなら、私はやかましい鐘やさわがしいどらとなってしまう。2たといまた、私に預言する力があり、すべての秘義とすべての知識とに通じ、また山を移すほどの全き信仰があっても、もし私に愛がないなら、私はむなし。3たといまた、私の全財産を施し、また私のからだを焼かれるために渡しても、もし私に愛がないなら、私は無益である。……

【コリント前1】

18それ十字架の言は亡ぶる者には愚かなれど、救わるる我らには神の能力なり。……22ユダヤ人は徴を請い、ギリシヤ人は智慧を求む。23されど我らは十字架に釘けられ給いしキリストを宣べ伝う。これはユダヤ人に蹟物となり、異邦人に愚かとなれど、24召されたる者にはユダヤ人にもギリシヤ人にも神の能力、また神の智慧たるキリストなり。

【コリント前2】

4わが談話も、宣教も、智慧の美しき言によらずして、御霊と能力との証明によりたり。……10然れど我らには神これを御霊によりて顕し給えり。御霊はすべての事を究め、神の深き所まで究むればなり。11それ人のことは己が中にある霊のほかに誰か知る人あらん、かくのごとく神のことは神の御霊のほかに知る者なし。云々

●福音の心臓

今日は年頭に、ちょうどコリント前書13章がかかるということも不思議なことだと思う。13章はとても一回ではできないと思いましたので、これを多分、三回か四回にわけます。



今日は始めの三節だけです。実は、1957年8月9日から11日にかけて浅間高原小諸の夏期特別集会でコリント前書13章をやりましたが、そのノートがこれだけある。

(註：詩篇103「絶対恩寵」、コリント前13章「愛なくば」「愛の本質」「愛の知」「最大なるもの」)

その頃の人は実によく書いたですね。これは録音ではないですよ。速記的に書く。ちゃんと綴じてくれてね。驚くべきものです。昨日、これを読んでいて、自分で酔ってしまった。酔うといえば、佐久間象山の「象山酔書」という本がある。酔い心地で書いたという。預言者エレミヤも、

「我は神の言に酔えり」

と言っている。聖書に酔うほどになればダメなんです、酒にばかり酔っていたのでは。

「どつぞ、お楽になさってください。寄つかかっても寝てもいいです。

これは夏でね、弱い人がだいぶいたものですから。

その壁の方にいらつしやる方、私の顔の見えない方がありますか。こっちの庭の方においでになった方がいいかもしれません。庭の方の席はたくさん空いていますから、涼しくていいですよ」

なんて、そんなことまで書いてある(笑)。とにかく、すべてノートしてあるんだから、聞いたね。そして、私がここに詩を書いているんだな。

「世紀の嵐吹かば吹け。さゆらぎのなきは富士の峯。

秋津島根の民草よ、力の元は聖書なり。

思想百練世も我も、文化に資する創造の

業の基は聖書なり。今こそ来たれ、御言に。

大地の愛を胸に秘め、煙絶えせぬ火山国

浅間山がありましたからね、

大和島根の民草の、愛をば生くべき時は来ぬ。

噫、憎しみの闇の世や。

愛しみの火あかあかと万の胸に灯さん。

祖国と世界に愛の火を。

国史の絵巻、二千歳。湖心に宿る琵琶の月。

天賦豊けき国民の天恵具現の時近し。

噫、苦しみの渦の世や。地の極までも身を挺し、

世の末かけて祈らん。この危機の世に救いあれ。」

これは原作だね。それから後でなお作りましたけれども。なにしろ、これは貴重なものだ。ちゃんときれいに綴じてある。何もこれを今お話するわけではないけれども。



私は『福音の心臓』（曠愛新書第1号、1965年3月刊）という、コリント前書13章をこのノートから――「から」というわけでもないけれども――まとめた本がある。こういうのは講談社あたりから出してもらいたいと思うくらいです。一般に知らせたいです、正直。誰か講談社の人を知ってたらね。

●三つの焦点

私の訳で始めの三節だけを読みます。

【コリント前13】（私訳）

¹たとい私が人間や天使の異言を語っても、
もし私に愛がないなら、

私はやかましい鐘やさわがしいどらとなってしまふ。

²たといまた、私に預言する力があり、

すべての秘義とすべての知識とに通じ、

また山を移すほどの全き信仰があつても、

もし私に愛がないなら、

私はむなし。

³たといまた、私の全財産を施し、

また私のからだを焼かれるために渡しても、

もし私に愛がないなら、

私は無益である。

コリント教会はいろいろの問題を持っていた教会なんです。しかも、パウロが建てた教会の中で一番大きな教会ですが、そういう意味において、コリント前書、後書というものは――特に前書がそうですけども――我々の信仰生活に具体的にいろんなことを提供してくれるところの大事な書簡です。多分、紀元51年から53年の間に書かれたものだと思います。コリント伝道は、パウロがやった大きな伝道です。

このコリント前書の中に三つの焦点がある。一つは、第1章18節から24節のところ、

「¹⁸それ十字架の言は^{ことば}亡ぶる者には愚かなれど、救わるる我らには神の能力^{ちから}なり。……²²ユダヤ人は徴を請い、ギリシヤ人は智慧を求む。²³されど我らは十

字架に釘^つけられ給いしキリストを宣^のべ伝う。これはユダヤ人に蹟物^{つまずき}となり、

異邦人に愚かとなれど、²⁴召されたる者にはユダヤ人にもギリシヤ人にも神の能力^{ちから}、また神の智慧たるキリストなり。」（コリント前1：18～24）

即ち十字架が徹底的に一つの中心になっている。パウロは十字架の福音に反対していたんですからね、始めは。それをひっくり返された。

第二番目の中心は第2章4節から、



「4 わが談話も、宣教も、智慧の美しき言によらずして、御霊と能力との証明によりたり。……¹⁰然れど我らには神これを御霊によりて顕し給えり。御霊はすべての事を究め、神の深き所まで究むればなり。¹¹それ人のことは己が中にある霊のほかに誰か知る人あらん、かくのごとく神のことは神の御霊のほかに知る者なし。云々」(コリント前2・4～11)

10節から15節まで、聖霊のことが非常に書いてある。聖霊は我々が生まれつき持っている霊ではない。キリストから与えられるところの御霊であって、しかも、十字架を通ったキリストです。地上のキリストはこの聖霊を与えなかった。瞬間的には弟子たちにも与えましたけれども、それは消えることをキリストは知っておられた。

「私が十字架に架かって、それから――祈って待っている――今度は、聖霊を降すから」

とはつきり、キリストがその順をちゃんと知っておられた。即ち、贖罪を、罪の贖いをしなければ、本当の意味で聖霊はくだらない。十字架を本当に受けとらない限り、聖霊は来ない。霊的に何か高揚しても、それは本当の聖霊ではないというわけです。そういう順序から言っても、コリント前書は素晴らしい。

十字架、それから、聖霊と来ている。十字架と聖霊は、いつも申し上げているとおり、この二つは離すことができない。聖霊と言えば、その奥に十字架がある。十字架と言えば、それは聖霊に展開していく。でなければ、十字架を負う力はないんです、この聖霊が来なければ。いろんな苦難に遭つても、十字架を負うということは、力んだってダメです。

それから、その次に来るのは、コリント前書15章の復活のことです。キリストの復活、永遠の生命。「復活」と言ったって、「肉体がただ元へ戻った」というのではない。霊体として現れる。霊体的存在になるわけです。本来、霊体をキリストは肉体の奥に持つておられた。だから、キリストはいきなり霊化してしまうわけです。霊体を有った聖霊の存在として現れてきた。これは不思議なものだから、電波みたいに、戸が閉じていたって入ってくる。ルカ伝の終りの方に出ています。

この三つが中心です。この三つの中心を一つの言葉で言っているのがコリント前書13章です。「愛」なんです。「愛の讃歌」という。私はそれを「福音の心臓」と言う。福音の極まるところは結局、この愛なんです。東洋でも、孔子、孟子の教えの極まるところは仁ですから。あるいは、恕ともいう。思い遣りです。思い遣りという言葉も聖書にあります。

コリント前書の12章と14章にはこの聖霊のことが非常に書いてある。その間に13章が出てきている。これも不思議な構造になっている。その間で、この愛が出てきた。この愛というのは霊的な愛に決まっている。そういうことをパウロは言っていないけれども。パウロはコリント前書13章で福音の愛の構造を言っているのではない。気合をもつて言っているので、論理的答案としては、13章は決して立派な答案ではない。神学的答案ではない。



けれども、パウロは体験から、止むにやまれずして、ある角度から焦点を結んで語っているわけです。

●神の愛

愛のことですぐ念頭にくるのは、ヨハネ書簡です。ヨハネの手紙を見てください。特に第一書の4章のところ。ここにもまた始めの方は霊のことが随分出ている。

「愛する者よ、凡ての霊を信するな、その霊の神より出づるか否かを試みよ。

多くの偽預言者、世に出でたればなり。」(ヨハネ14:1)

霊には善玉と悪玉がある。悪霊や悪鬼というやつはとにかく霊ですから、キリストが神の子であることを最初に言ったのは、あのマルコ伝5章に出てくるところの悪鬼なんです。悪鬼に囚われたやつが

「お前は神の子だ」

と言った。

「私を顕すな」
あらわ

とキリストが言われた。弟子どもや家の人たちは、キリストが神の子であることが分からない。

「この頃、何かだいぶ珍しいことを言ったりしたりしているが」

なんて、変わり者くらいにしか分からなかった。ところが、霊は霊の世界が分かる。ことにキリストの霊は強いから、それで、悪鬼は逃げていくわけです。6節に、

「真理の霊と迷謬まよひの霊がある」

なんて書いてあるでしょ。7節に、

「愛する者よ、われら互に相愛すべし。愛は神より出づ、

とある。はつきりとした言葉です。もともと、愛というのは神さまから来ているんだと。

おおよそ愛ある者は、神より生まれ、神を知るなり。愛なき者は、神を知

らず、神は愛なればなり。」(ヨハネ14:7-8)

愛の元は神なんです。「神の愛」(ゴッテス・リーベ)というのは、神が主体です。神を愛するという目的的な言い方も、同じ「神の愛」と言いますけれども。「神が愛する」のであって、「神を愛する」のではない。ところが、キリストが

「汝、心を尽くし力を尽くし思いを尽くして、主なる汝の神を愛すべし。また、

隣人を愛すべし。この二つのことは一つだ」

と言われたでしょ。だから、みんな、そのキリストの言葉でもって、

「さあ、私は神さまも隣人も愛しなくはいかん」

と、一生懸命でやるわけだ。それではくたびれてしまう。神さまから来ているその愛でもって――これは反射するように――縦と横に流れていく。それならいい。その根源を知ら



ないで、それなしでもって、

「さあ、神を愛せよ」

なんて言ったって、私はくたびれてしまったね、まだ若いときに。

「神を愛せよと言ったって、どうもうまくいかない」

と。無教会時代の信仰では、それは時々もちろん聞いてますよ。聞いていても、そのところは本当に身体で受けとられていないものだから。すべて頭で分かったってダメなんです。身体で、全存在で受けとっていかないとね。

だから、

「愛は神より出づ」

と、ちゃんと書いてある。

「⁹神の愛われらに顕れたり。神はその生み給える^{ひとりご}独子を世に遣し、我等をして彼によりて生命を得しめ給うに因る。」(ヨハネ14・9)

と。愛が現れた。それはキリストがやってきて――世に独子を遣わした神さまなんだ――その生命を私たちに下さる。生命の下さることが愛の内容なんだ。愛の内容は「永遠の生命」です。「神は愛なり」とは感情ではない。

「具体的に永遠の生命を与えてくださる。死んでも死なない生命を与えてくださる。

これが神の愛の内容だ」

ということ。

●贖罪と永遠の生命

「¹⁰愛というは、我ら神を愛せしにあらず、神われらを愛し、その子を遣して

我らの罪のために^{なだ}宥めの^{そなえもの}供物となし給いし是なり。」(ヨハネ14・10)

このヨハネ書簡は非常にはつきりしている。永遠の生命と、もう一つは贖罪です。本当は、罪の贖いの方が先なんです。そっちを先に言えばいいんだけど、ひっくり返して言うのである。

「十字架をもって、お前たちの現在も過去も未来も全部、自我というものは全部、

私が引き受けた」

というのがこの十字架でしょ。それが贖罪ということですよ。

人間は誰でもみんなエゴイストですから。エゴイストでない人は一人もいない。

「万人は罪びとだ」

というのはそのことなんだ。

「何も悪いことはしてませんが」

なんてみない言うけれども、そうじゃない。エゴイズムが「罪」です。個人も社会も国家もみんなエゴイズムだ。だから、何のかんのと問題は尽きない。これは歴史の終りまで尽き



ない。決して解決しない。お釈迦さんやキリストが出てきたわけなんですよ、その根本的な解決をするために。その解決を受けとつても人間はダメだから、地上では決して、その神さまの本願の通り、如来の本願の通りいかない。だから、救いを要しない人は一人もない。ということとは、

「万人はこれ宗教人である」

ということなんです。そのことに気がつかない。

教育はそこから始まらなければ、本当の教育はいかない。大体、日本の教育は、教育審議会とか何とかやっているけれども、文部省が司法省と同じように政治から独立しなければダメだ。政党が変わるごとに文部大臣が変わったらダメですよ。文部省が独立して、いわゆる官僚でなくて、宗教的哲学的な人が文部大臣になってやっていかなければ、本当の百年千年の日本の教育はいつまでたつても成り立たない。単なる制度ではない。

それと、校長が宗教心をもたなくてはダメです。それから先生方が。校長さんたちの大集会で私は言つたでしょ。

「校長さんたちは山に籠もつて、まず瞑想し祈つてから、教育しようじゃないか」

と、私は三回言つた。

「小池というのは変わり者だ」

なんて思つたかもしれないが、変わり者ではない。それが本当なんだ。どこへ行つたつて、この頃は、私はもう遠慮なくものを言うんだ。

●聖霊の愛

この愛は贖罪です。贖罪愛。それから、永遠の生命を与えるところの愛。これが愛の内容なんです。贖罪と永遠の生命です。

それで、まだ足りないんだ、本当は。永遠の生命の質は愛なんです。これは同じなんです、逆に言う。その愛の質は何かというと、この聖霊から来ている。

「聖霊の最初の名は愛である」

と、トマス・アクイナスが言つた。今、一般のキリスト教界がこの御霊から非常にずれてしまっている。だから、

「原始の使徒たちの信仰に立ち返らなくてはいいかん」

ということ、我々はやっているわけですよ。本当はこんなところで叫んだつてしようがないんだ。どうしても私はテレビに一遍出たいんだけどね、何かつてができれば。そのうちに、やむにやまれずして出ることになるでしょう。百歳くらいになったら（笑）。

「化け物みたいな人が現れた」

なんてね。

「愛する者よ、斯のごとく神われらを愛し給いたれば、我らも亦たがい相



愛すべし。」(ヨハネ14・11)

こういう言い方が困るんだよ。

「神は愛したから、我らも愛すべし」

なんて言うのと、またこれが律法になつてしまう。

「神の愛を受けとれば、愛せざるを得なくなるぞ」

と書いてもらいたいんだ。私は聖書をもつと大胆に、パウロもヨハネも時々超えるような訳し方をしたいと思うくらいです。上からの力と光でもって押し出されなければ本ものではない。考えて何かをするようなことでは。自動車の運転だつてそうでしょ。

「さて、その次はこっち側を踏んでから」

なんてやってたら、ドカーンといっちゃう。あれは衝動的にやっているでしょ。もう身体的一部分ですよ、アクセルもクラッチもブレーキも。そういうように自然に動いている。

自然ということ。第二の自然性となる。それは靈然、神然(神)はプラスの世界。こっちはマイナス。私はマイナスそのもの。そうすると、これは放電するわけだ。バーツと。だから、楽しくてしょうがなくて、力が来てしょうがないんですよ、正直、私は。しょうがない世界、止むにやまれざる世界なんだ。

「すべし、すべからず。しなければならぬ」

なんて、そんな世界ではない。それは道徳の世界です。道徳では行き詰まってしまう。道徳が悪いとは言わないよ。まあ、若い人たちはみんな先ず道徳の世界をしつかりやってくださいよね。そして、行き詰まったら、そうしたら次の次元に入つてこないダメです。しかし、いきなり入ると、今度はちよつと逸脱しちゃつて、ドカーンと落ちたりする。

西郷南洲なんて正にこの「然り」の世界に生きた。

「天を相手とせよ」

と言つた。これは、

「神を相手とせよ」

と同じことです。「天」という字は非常に重宝な字だ。如来でも神でも何でも、とにかくそういう絶対者の一番総合的な言い方は「天」です。易者が私を見て、

「あなたは天に関係していますね」

とはつきり言つたもの。易というのは馬鹿にならない。

●無即無限無量

コリント前書13章に対するところの解説はヨハネ書簡第一書の4章なんです。

「¹³神、御霊を賜いしに因りて我ら神に居り、神われらに居給うことを知る」(ヨハネ14・13)

と。これは素晴らしい句だね。神さまが御霊を下さつたので、それで



「我れ神の中に、神わがうちに」

という。

「いや、実にお前は神だ」

と、こないだやったでしよ、詩篇82篇で。

「汝らは神なり」

という言葉。あれはもの凄いい言葉です。キリストが82篇を引用された。

「神と一つになれば、神と言ったって悪くはないではないか」

というわけだ、キリストは。正宗の名刀みたいだから、

「俺は神だぞ」

と手放しで言ったら、自分を切りますよ。これは平伏しの魂でなければ、

「我を視よ」

ということはいえない。ペテロもパウロも、本当は彼らはぶつつぶれていきますからね、自分がないですから。それを私は

「無者」

と言っている。我無き者。このキリスト自身が無者だから、私は『無者キリスト』という本を書いた。自分を何者ともしないで、ゼロだから、キリストは無限大になった。神という無限大に。

「ゼロ＝無限大」

「無即無限無量」

という。そうしたらもう、行き詰まりはない。何でもできるから。私もどれくらい人を助けたか分からんですよ、自分で言ったらおかしいけれども。力が働くもの。

大気は、誰かお金を払って空気を吸ってますか。絶対にこれはただでもらっている。牢屋の中にいても大気は只だ。水は、水のないところではお金を払わなくてはならないけれども、大気だけはただです。ところが、この気が一番大事なんです。価のないものが無限の価をもっている。だから、大気の如き人になればいいんですよ、我々は。

空気は一つもこだわりがない、見えない。見えないけれども、在るんです。絶対無にして絶対有の世界なんだ。相対的な世界ではないんです…（異言）…。そういう凄惨な事態に魂が入ってしまうから、今私はちよつと異言が出たけれども。そういうようなことで、もう何ともかんとも説明できない。

その世界に入るためには、いつも申し上げているように、祈り込まなくてはダメです。全身で。ただ口で祈っているのではない。全存在をキリストの中に投げ入れることです。

「我を棄てよ」

というのは、

「キリストの中に棄てろ」



ということです。そこらに棄てるのではない。キリストは神の中に自分を棄てたから、

「神の懷の中にいる」

と書いてあるじゃないですか。私はキリストの懷の中にいるんだ。

「ぶつ倒れたと思つたら、どつこいこれはキリストの懷の中でした」

というわけです。皆さん、行き詰まりは全然ないですよ。

「まだ私は少し聖書の読み方が足りない」

だとか、

「人の愛し方が足りない」

だとか、何とかかんとかと言つて、みんな自分の側を見ているでしょ。自分の側を見る必要はない。キリストを見てください。見るばかりでなくて、入ってくださいよ。グーッともの凄い回転が始まるから。そういうことなんです。

●もし私に愛がないなら

コリント前書13章は、ヨハネ第一書4章で読むと、

「なるほど、パウロの言っている愛はこの愛だな」

ということが分かる。また、コリント前書13章に返りましょう。

「たとい私が人間や天使の異言を語っても、もし私に愛がないなら、私はや

かましい鐘やさわがしいどらとなつてしまう」

「天使の異言」の「グローサ」というのは「舌」という字で、普通の言葉ではない。異言です。

「私は人間の異言を語ります。また、天使の異言――あるいは霊言ともいう――天使の言葉を語っても、もし私に愛がないなら、私はやかましい鐘やさわがしいどらとなつてしまう」

と。というのは、異言はときどきもの凄い音を発するから、ヘタすると、人を躓かせる。

「なんだ、あれは気違いではないか」

なんて。聖霊が降りたときに、もの凄い異言が発したので、みんなびっくりしてしまつて、

「酒に酔っているのではないか」

と言つた。そうじゃない。

「そうじゃないよ」

とペテロが言っている。何か烈しい現象が起きると、みんなおかしいと思つているが、おかしくはないんだ。その烈しい現象の奥の世界の静かなところに入らなければいかん。しよつちゅう

「ワッショイ、ワッショイ」

ではない。その「ワッショイ」ではないんですから、本来は。みんな上から来る力でそこに爆発してくる。自分から何か爆発しているのではない。



「もし私に愛がないなら、私はやかましい鐘やさわがしいどらとなってしまふ」
ドラのように、ジャンジャンというのと同じだという。パウロは、「もし、もし」と仮定法で言っているが、

「実際は、私は天使の異言も語ります」

ということ。「もし」と言ったって、そうなんだ。パウロはもの凄いかリスマの人ですから、第三の天にまで上がったような人だから、全部これは彼は体験している。異言を語っても――「もしも」ではない、「たとい」でもない――

「私は実際、異言を語りますが」

というのを、「もし、語るとしても」というように言っている。

「私は実際、異言を語っていますが、もし私に愛がないならば、もし私が愛を持たないならば、私はやかましい鐘やどらとなってしまふ。いくら異言が語れたってダメなんだ、もし愛がなければ」

ということです。

こういう言葉を見るとね、

『もし、愛がなければ』と言うが、私もなかなか愛がなくて困りました。異言も語れませんし、どうにもなりません」

なんて思うけれども、

「もし、私に愛がないならば」

という、こういう仮定はいらんんです。

●私にはキリストの愛が来てます

「私はキリストに愛されています。私は十字架でもって贖われました。他の誰もが愛してくれない愛をもつて、私はキリストに愛されて、救われてしまった」

と。これがキリストの愛の具体的なものでしょ。愛されて救われたことですよ、「愛された」ということは。感情的に愛されているのではない。皆さん一人ひとりそうです。私にはキリストの愛が来てますから、「もし私に愛がないなら」なんて言えない。

「もし私に愛がなければ」

という仮定は本当はいらん。

「私には愛があります。キリストの愛があります」

とはつきり言える。

パウロは、

「もし愛がないならば、もし愛がないならば」

ときかんに言っている。

「私はなかなか愛がなくて困ったものだ。少しは30%くらいはあるけれども、早く



70%くらいになりたい」

なんて、ダメだよ、そんなことを言っていたら。これもパウロの言葉にまた躓く。

「聖書の言葉にも躓いてはいかん」

と私は言いたい。キリストの言葉にも躓く。キリストの言い方が時々、

「信仰薄き者よ」

なんて言うのと、

「さあ、厚くならなくてはいいかん」

なんて思つて、一生懸命で熱くなる。ダメだよ、そんなことは。空っぽになった方がいい。絶い、信の信という。

「自分の信仰なんか、信仰すら私するな。そうすると、上から本当の信が入ってくる」
と。全部、上から来るんです。

恋愛であろうと、夫婦愛であろうと、兄弟愛であろうと、師弟愛であろうと、全部、神さまから来ている。これは全部、アガペーなんです。

エロスだつてあるよ。それはギリシア的な、下から浪漫的にまた理想主義的にアイデアの世界を追求してやまない。あのプラトンの哲学だ。プラトンの哲学でも、上からくる面もあるけれども。そういう下から追求してやまない愛を「エロス」という。これはゲーテの『ファウスト』でいうところの

「ファウスト的な衝動」

です。それは自己完成を望むんです。自己完成を望むことは悪くはないけれども、自己完成を望む、その下からの角度よりも、上からの角度をいただくとは本当の自己完成になってくる。自己ならざる自己の完成になってくる。これが「アガペー」です。

けれども、人間にはそういう角度も、そういう衝動も与えられている。我々が持っているところの理性も悟性も感性も全部、神さまから与えられた衝動だから。ただ、その衝動も本来は全部、上から来ているものだということの大自覚がなければダメなんです。そうしたら、このエロスとアガペーが渾然^{こんぜん}として動きだす。

いつもこつち（アガペー）が主動的です。人間は霊肉渾然^{こんぜん}たる存在だから、霊肉渾然として全体を霊的にされていくには、この角度を本当に受けとらないと、そうならない。どんなに立派な人だつて、自己中心なら、それはダメです。どんなにガタガタな人間でも、神さま中心に生きている人はいいんです。それを霊的という。

人間にはいろいろなハンディキャップがあるからね。

「私はもうしょうがないな」

という人でも、キリストを求め、キリストに祈っていけば、現れた結果がこつちが10点、別の人は60点でも、神さまはこの10点を良しとする。人間の成績と違うんです。この10点をとった者は、マイナスの強いやつがこの10点にやってきた。



「お前はよく上からのものを受けとった」

と。ところが、あつち生まれつき調子がいいものだから、60点くらいはすぐ取ってしまうけれども、

「お前は、上からのものを受けとってないで、ただ生まれつきもらったものでいい気になっているではないか」

ということになる。これは蓄電池だからダメなんだ。

本当は、人間を成績で量つたらいけない。学校の先生も成績ばかり見ている。入学試験も本当は人物全体から判断していかなければダメです。だから、どうですか、点取り虫が社会に行ったら、あまり仕事ができない。ところが、少ししようがないやつが社会では大いに活動する。一人びとりにはいろいろな特色があるんだから、

「落ちこぼれ」

なんてのは一人もいないわけなんです。そういう角度から、私は若ければもう一遍教育したいくらいに思うけれども。

●自然靈然が働いていく

「もし、愛がなければ」ではない。

「愛は来ています。人間的な異言も天使の言葉も私は語りますが、もつとも大事な愛がキリストから来てます。だから、問題ありません」

というのが本当は、この第一節の本当の答案なんです。

2 だとまた、私に預言する力があり、すべての秘義とすべての知識とに通じ、また山を移すほどの全き信仰があつても、もし私に愛がないなら、私はむなし。

「愛がないならば」と言つて、愛というものを何か私したら、これもダメです。

「私には愛はありません」

と、逆に言う。

「私は愛がありませんから、キリストの愛がやって来しました。可哀相な人を見れば、助けざるを得ない。水がなければ、水を飲ましてあげざるを得ないんです」

と。さつきから言っている、自然靈然が働いていくわけです。人間はそう100%にはいきませんよ、人間というやつは。けれども、その角度で動いているのが本ものなんです、どんなに惨めであつても。ところが、作られたものは本ものでない。それはいわゆる律法の義なんです、

「律法の義につきては責むべきところなし」

とパウロが言ったのは。

『すべし、すべからず』を一生懸命でやってきました。それで私は道徳的にチャ



ンピオンです」

と、パウロは初め思っていたわけだ。宗教的・道徳的にチャンピオンだと。ところが、それはみんな自己主張だった。それでキリストにひっくり返された。だから、

「お前は私が分からないから、私を信ずる者を迫害しているな。とんでもない話だ」というので、復活のキリストが彼をひっくり返されたでしょ。パウロは、

「わが眼より鱗の如きもの落ちたり」

と、キリストに降参した。福音の世界は降参するまでは、入れないんです。分かるの分からないのと、そんなことではない。

●神秘的現実

神の奥義ということ。「ミステリー」というのは「奥義」という字で、これは非常に大事なことです。福音の世界はみんな神秘なんです。

私が無教会にいた時に、無教会の人たちには、「神秘」という言葉は非常に嫌われた。

「信仰だ。神秘なんていかん。信仰、信仰」

と言っている。それは観念信仰です。本当は頭に観念が付いている。彼らはみんな知らない。ダメです、そんな観念信仰では。信仰は本当は「信行」です。こういう現実はみな神秘なんです。神秘的現実です。

「そうか、あなたはキリストの中に入ってしまったか。それでは私は入れませんね」なんて、そうじゃない。誰でもが入れれる。だから、神秘なんです。

「そうか、あの人が先に入ってしまったか。私はもう入れない」

なんて、そんなことじゃない。霊なるキリストは、百万人いようが、一億人いようが、百億人いようが、全部の中に全的に入る。空気は誰の中にも入ってくるでしょ。それと同じことです。

「私は、空気は吸いません」

なんて言ったら、窒息してしまうよ。私たちの霊はキリストの気を吸わないとね。キリストは神の気の中に入っている。

「天地正大の気」

ということ。

またといたまた、私に預言する力があり、すべての秘義とすべての知識とに通じ、また山を移すほどの全き信仰があっても、もし私に愛がないなら、私はむなししい。

パウロは預言する力もありましたよ。秘義も知識もちろん彼は持っていた。第一級の人物でしたからね。「山を移すほどの信仰」というのはキリストが言われた。

「芥種一粒の信仰があるならば、この山にあちらに移れと言えば移る」



というような言葉をキリストは言われた。まあ、気違いみたいなことを言ったね、キリストは。あれはキリストの言葉だから、みんな畏^{かしこ}まつているけれども、他の人が言ったら、

「なんだあの野郎は。ちよつと気が違っているんじゃないか」

なんて。そういう言葉ですよね、キリストの言葉は。

芥種一粒は小さい。これが大きな木になるというわけだ。この中に原始力が入っている。原始の力が。キリストという、神という原始の力が入っているんだ、この

「芥種^{からしだね}一粒の信」

というのは。何ですか、この「一粒の信」とは。全存在が芥種一粒みたいな小さなものに焦点を結んでいなければいかん。焦点は焦げる。火を発する。魂が凄い焦点を持っているなければダメです、分裂したら。どこに焦点を結ぶか。キリストです。キリストに焦点を持っている。魂がキリストに焦点を持っていると、魂が火の如くなる。そうすれば、このキリストの火が、火の力が、原始の力が山を動かすというわけだ。それは譬えをもつてキリストはそう言われたのでね、

「山でも動かすような凄いことだよ」

ということです。キリストは何も本当に山を動かしたりしなかった。

「何もできないことはないぞ。私に居れ。そうすれば、何でもできるぞ」

と仰っているんだ、キリストは。「何でもできる」と言ったって、私が絵が描けないのに絵が描けるという、そういうことではない。

「その人の与えられたその才能において無限の展開が始まるぞ」

ということですよ。一人びとりはみんな与えられた才能や資質があるからね。人真似する必要はない。

けれども、それほどの素晴らしい信仰の世界を持っていたても、もし愛がないならばと。本当は、

「もし愛がないならば」

なんて、そんな仮定は、さつきから申し上げておおり、要らない。

「キリストの愛はそういった霊的現象以上だぞ」

ということをおうとしている。

「異言も結構だ、預言も結構だ、人を癒す力も結構だ。いろいろな賜物、霊的な賜物も結構だが、しかし、それにまさるものはこの愛なんだ」

と。この愛も霊的な愛の力を持つているから、今言ったようないろいろな現象も実は、本当の意味では愛の現象なんです。愛が働く。全部、キリストの愛が働いて、いろんなことをする。本当は、別のことではない。だから、

「そういう素晴らしいことは実は愛から来ているんだよ」

と言いたいわけです。そんなことは在ってもなくても、どうだっていい。問題は、



「この愛が本ものか」

ということだけが問題です。それが本ものかと。具体的な「本もの」というのはキリストです。愛なるキリストです。

「愛なるキリストを宿していれば、問題はないよ」

ということなんです。そうすれば、必ずそれが働く。現象する。これは本体と現象が相即している。

本体と現象が相即してものをつかんでいた人はゲートです。ゲートという詩人はそういう二段構えな判断はしない。現象において本体を見る。本体と現象とが不可分の関係に彼においてはあった。

「私にはキリストの愛があります」

と、ただ言ってたつてダメだよ、現象していなければ。それを身証という。身体で証していなければ。

「本当に人を助けているか」

と。ところが、無教会はそれをやってないから、観念信仰だと私ははっきり言うんです。私は永いこと無教会にいたから知っているんだよ。ギリシア語だのヘブライ語だの勉強ばかりしている。

身体でもって証するときに、それは上から限りなくやってくる。それでないと、これは腐ってしまう。淀んでしまう。淀んでいる水はダメだ、泉でなければ。泉水でなければダメなんだ。池の水はダメだね、小池というのは。私は名を小泉に直そうかと思うくらいだ。大泉くらいにしたいな。名前は変えてもいいけれども、姓の方はなかなか変えてはいけならしいね。まあ、いいよ。小池の中にも泉は湧きますから(笑)。

●相即一如

コリント前書13章なんていったつて、パウロのまた奥を読まなくてはダメですよ。パウロは

「もし愛がなければ、もし愛がなければ」

なんて、「もし、もし」なんて言うけれども、

「愛があります。愛は来てます。キリストの愛が来てますから、私は動かざるを得

ません。人を愛さざるを得ません」

というわけです。本体と現象が相即していなければダメです。みんなこの相即の世界だね。一如の世界です。相即している。一つである。相即、一如。いい言葉だね、これは。このことは、ヨハネ伝15章で葡萄の樹の譬えでもってキリストがさんざん言っている。

「私の中にいなさい。宿っていなさい。そうすれば、そうすれば」
と言っている。



「私はそのようにしてお前たちを愛しているではないか。神と私が一つのように、お前たちとも一つになりたいんだよ」

と言っている。それをみんな遠慮しているんだ。日本人は遠慮が多くて困るよな。信仰の世界は遠慮はいらん。どんどん入ってください。

³たといまた、私の全財産を施し、また私のからだを焼かれるために渡しても、もし私に愛がないなら、私は無益である。

こんなことは、いい加減な気持でできつこないんだけど、たとえそうしても、もし、それが愛の行為でないならば無益な話だ。やけくそになつて、そんなことをしたってダメだよ。「愛全」なんていう言葉はないけれども、まさに「愛全」の世界なんだ。

「神は愛なり。キリストは愛なり」

というのは、

「具体的に人を助けること、救うこと。愛するとは、敵をも担い上げること」です。

「敵を愛せよ」

とはそういうことです。己をみんな棄ててかかっている。それは棄身の愛という。アウシユビツツのあのコルベ神父さんは本当に棄身の愛をした。

「私を代わりに処刑してください。あの人を助けてください」と。

「その友のために己の生命を棄てる。これより大なる愛はなし」

という。この「棄身」という言葉は、さつきから申し上げているように、キリストの中に自分の身を棄てるんですよ。キリストの中に棄身だから、本当は棄身せざるを得ない。キリストの中に棄身すると、もの凄い力がくるんだから。自分はキリストの中で影を失ってしまっている。それだから、これが人を助けることになる。「棄身の愛」というのは、力んだ棄身ではダメです。キリストの中に棄ててごらんよ。もの凄い力が来るから。そうしたら、人を助けざるを得ない。

ペテロが生まれつきの跛者に、

「私には金銀がない。わがうちにあるものを汝に与う」

と言った。あれは、

「我は、力の在る人のうちに――キリストの中に――在るから、だから、お前を助ける」

と言うのと同じことです。

「イエス・キリストの名によりて歩め」

と言った。そう一言発すれば、跛者が立ち上がってしまう。あの通りなんです。そうしたら、ペテロという人は大変な信仰の人だと思つて、今度はペテロを拝もうとしたら、



「なぜ、私を拝もうとするか。私ではないぞ。キリストだぞ」

と。使徒行伝3章のペテロのあの姿は本当の信仰の姿です。自分が空っぽになって、キリストになっている。だから、それが働いたので、今度はペテロを見たから、

「私を見るのではないぞ」

と。「我を視よ」と言った彼が、「なぜ、私を見るか」と言った。その絶対矛盾の自己同一ということ。楽しいでしょ。どうですか、楽しくないですか？

● 放心

これは孟子の言葉だ。

「孟子曰く、放心を求むるをもって学問の道となす。放心を求むる者は即ち仁を求むるなり」

これはいい言葉だな。

「放心」

というのはエックハルトの

「アップゲシーデンハイト」

と同じこと、

「自我の心から放たれこと」

なんです。だから、

「身心解脱」

の意味なんです。解脱を、自己から離れることを求むるをもって学問の道となす。本当の学問というものは自我心があつてはいかん。真理に対するところの無私の角度からやるのが、本当の学問の道となすという。素晴らしいね、学問の本当はそうだと言う。真理の中に自分を没頭することです。

「放心を求むる者は即ち仁を求むるなり」

と。根底的には、放心を求めるということは、自分がなくなると、本当にそれは仁を、愛を――人を愛すること、仁を施すことを――求むることになるのだと。論理的には超越している。

福音のキリストの光で読めば――私は老子のことを書いたでしょ。老子であろうと、仏教の第一流のものであろうと、孔子であろうと、孟子であろうと何でもいいですよ。古典を読んでごらんさい。おもしろいから――みんな見えてくるから。そして、その限界が分かる。キリストがいかに無限な素晴らしい方であることが分かる。

● 新宗教改革

信仰簡条をあげて、



「キリスト教というのは、こういうのが信仰です」

なんて、何を言っているか。「信仰箇条」なんてものは一つもいらん。だから、

「新宗教改革」

と言いたくなるんですよ、私は。偉ぶって言っているわけでも何でもない。やむを得ずして、かく言わざるを得ない。

何しろ、これほどの無限の無量の真理の世界に入れられちゃったら、これを表現しないではいられない。私の身証的表現は詩だからね。詩の上でもって表現する。一人びとりのその表現の仕方はいろいろだから、人真似は要らんよ、自分らしい表現の仕方をしてください。何でもいい。それをもって証せざるを得ない。

いろんなことが次から次へと起きてくるけれども、そんなことはもう二義的にして、第一義的なことでもって動いていきなさいよ。

「これがこうなってからやりましょう」

なんてダメなんだ。ちょうど雲のように、人生というのはいろんなものがあるから。風が吹いたり、雨が降ったり、雲がかかったり、嵐になったり、いろんなことがある。そういうあらゆる運命環境の変化の中を突き破っていかなければ。

「こういうことになったら」

ということはダメなんです。そういう相対的な条件を満たそうとしたって、決してダメです。

「そんなものはどうでもいい、何でもござれ。不如意になればなるほど逆に力が来るぞ」

というところが本当の世界なんです。絶対に行き詰まらん。いいですね。私は、そういうのが楽しくてしょうがない。「楽音」^{うぐいん}なんだ、福音でなくて。青年諸君は、

「ボーイズ ビー アンビシャス(イン クライスト)」

「青年よ、大志を抱け(キリストにあつて)」

というのは、そういう意味でアンビションを持たなくてはいかん。キリストにおけるアンビションだ。この福音を聞いておいてだよ、いい加減なことをしていたら、今度は天国に行こうと思ったら、

「ちよつと、待てくれ」

とキリストに言われるよ。

「お前は、ちよつとまず地獄を通ってから来い」

と(笑)。ダンテみたいにまず地獄を通って行く。ダンテの『神曲』は素晴らしい。これは世界最高の詩だろうな。ゲーテも凄いいけれども、構造としてはやっぱりダンテの方が上だろうな。

それで、楽しくなったでしょ。このコリント前書13章は、

「もし、愛がないなら」



なんて、パウロはこんな言い方をしているけれども、

「愛がないならなんて、そんなことは私は考えませんよ。キリストの愛が来てないで、私はどうして生きていられますか。エロースもアガペーもヘッタクレもない。

全部、神の愛だ、キリストの愛だ。そんな余計な分析はいらない」

というようなわけです。矛盾の大調和という世界です。

パウロはこれだけの賜物はみんな持つていたんですよ。預言、異言、山を移すほどの信仰は全部、パウロは実際にいただいていた。けれども、「もし、愛がないなら」と言っている。愛がないどころではない。パウロは、キリストの愛が来てしようがない。だから、大伝道をしたし、ついには身を献げて殉道の死を遂げた。しかし、みんな聞く人に、

「神の愛、キリストの愛こそ、何をもつても比較することのできないものだ」

と言いたい。しかも、その愛は聖霊の愛です。間違えては困るよ。その愛の質は聖霊が持つているところの愛ですから。ただ人間的に愛なんて言っているのではない。御霊の愛です。

「もし、御霊の愛がなければ」

ということですよ。しかし、御霊の愛は来てます。何となれば、十字架を本当に受けとったからです。

「われキリストと共に十字架せられたり。もはや、われ生くるにあらず。キリストわがうちに生き給うなり」

と。

「御霊のキリストが私の中に生きていらつしやる。聖霊の愛は、生命は私の中に来
ています」

というわけです。

「然らざる者はキリスト者にあらず」

とパウロは言ってるんだよな。

楽しくてしょうがない。絶対恩寵の世界です。何をもつてこれを比較することができませんか、こんな素晴らしい世界を。何か不思議でしょうがないのですか、皆さん。何か仕事をしていてね、

「疲れるはずなのに、さっぱり疲れない」

だとかね。私は、こうやってしゃべったって、ひとつも疲れないんだ。逆に力が来ているんだから。しゃべれと言え、いくらでもしゃべりますよ。だけれども、やめますけれどもね。

